

偉人の習慣 vol.2

大きな成果は、小さな習慣から生まれる

渋沢栄一

実業家

1冊の本を生涯のバイブルにした男

渋

沢栄一（しづさわ いち）は、1840年に埼玉県深谷市の豪農の家に生まれた。

大蔵官僚を退官したのち、実業家として第一国立銀行（現みずほ銀行）や東京証券取引所、東京ガス、東京海上火災保険、麒麟ビール、サッポロビール、帝国ホテルなどといった、多種多様な企業の設立・経営に関わり、その数は約500ともいわれる。

渋沢の名著『論語講義』によると、6歳から、実父より漢文の読み方を教わり、その後、従兄の尾高藍香（おだか・らんこう）から『論語』などの四書（ほかに『大学』『中庸』『孟子』）をはじめとする漢学を教わった。毎朝、尾高の家に通い、3時間から4時間ほど学んだ。その学び方は、講師が解説を加えるといったものではない。数多くの書物を通読させ、本人が思い至るにまかせた。ただ読むだけで4年から5年経過したという。11、12歳になってようやく書物

に興味が出てきた渋沢だが、おもしろいと思ったのは、『通俗三国志』や『里見八犬伝』など、本人曰く「低俗な」小説の類이었다らしい。尾高は「それが最もよい。読書の読解力をつけるのには読みやすいものから入るのが一番よい」と言ったそう。何とも自由な教育だ。

渋沢が『論語』を重んじたのには訳がある。「大学」は国家を治める学問で、『中庸』は哲学書であり、『論語』だけが日常の実践の書だったからだ。渋沢と『論語』の特別な関係は、彼が官を辞して実業界に入ることになる1873年に始まる。

渋沢が実業家に身を転じたとき、多くの人たちが、卑しいだの、利己主義だのとさげすまれた。それからというもの、正しい道理の富を実現するために『論語』をバイブルとして、情熱的に学ぶことになる。

ただ読み込むだけでなく、専門家に教えるを請うために仕事の傍ら大学へ通ったというから、よほどだ。晩



年、一線を退いたあとは、専門家を呼んで講義を受けた。一人で受けるのはもったいないからと、子供たちもそこに招き入れたらしい。どれだけ学んでも、自分の解釈を完全なものとはせず、学び続けた。

実業家としての渋沢を見たとき、三井、三菱、住友など、同時代の創始者と大きく異なる点は、「渋沢財閥」を作らなかつたことだ。『論語』の「私利を追わず公益を図る」という考えを貫き通し、子孫にもこれを固く戒めた。



経営コンサルタント
堀越吉太郎

ほりこし・きちたろう◎東京都生まれ。世界有数のビジネスコンサルタント、マイケル・E・ガーバーから直接指導を受け、起業家精神に目覚める。「ガーバー社長が会社になくても回る『仕組み』経営」（中経出版）など著書多数。

あなたにも好きな本があり、尊敬する人がいると思う。その本やメモを常にそばに置き、学びと実践を続けられ、いずれその書物や人物の教えがあなたのものとなるだろう。

（文中敬称略）